

令和 元 年 5 月 17 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 H29 年度

受付番号 596

氏 名

奥村 京子

(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地：バーゼル大学（国名：スイス）

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと変わらないように記載すること。

現代作曲家ジェルジ・リゲティの音楽プロジェクトノート分析

3. 派遣期間：平成 29 年 4 月 1 日 ～ 令和 元 年 5 月 1 日

[病気を理由とする中断期間：平成 30 年 1 月 1 日～平成 30 年 1 月 31 日]

4. 受入機関名及び部局名

Department of Musicology, University of Basel

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)

(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)

(注)「6. 研究発表」以降については様式 10-別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

研究概要

ルーマニア出身のユダヤ人亡命作曲家ジェルジ・リゲティ (György Ligeti, 1923-2006) の音楽作品の作曲手法や創作過程を具体的に解明するために、リゲティが書いた創作メモ、スケッチ、自筆譜、出版楽譜、往復書簡の分析・解読を行った。

今日の現代音楽史において、リゲティは、過酷な出自を抱えながらも、常に周囲の音楽を見極め分析し、作曲家としての立ち位置を確立させた極めて重要な作曲家の一人となっており、彼の作品研究が待たれている。私は、海外特別研究員として、スイスのバーゼル大学音楽学部に 2 年間派遣されたが、大学近郊にあるパウル・ザッハー財団 20-21 世紀音楽アーカイブ・研究センターに滞在し、キュレーターとライブラリアンの協力を得ながら、リゲティが書き残した一次資料の解読作業に取り組んだ。

研究遂行状況

私は、博士後期課程の大学院生の時から、スイスのパウル・ザッハー財団 20-21 世紀音楽アーカイブ・研究センターに合計 15 カ月の期間、客員研究員として短期研究滞在した経験があるため、財団内のキュレーターやライブラリアン、秘書と既に親交があり、海外特別研究員としての派遣後も比較的早く、バーゼルでの研究生生活に慣れることが出来た。ただし、長期滞在するのは初めてであったため、滞在許可証の取得と、海外送金のためのスイス郵便局の口座開設に、やや手間取った。

滞在許可証の申請は、まず私の所属先であるバーゼル大学音楽学部の秘書と、渡航前からメールで連絡を取り、パスポートのコピーや、出身大学の卒業証明書と大学院の修了証明書、学位授与証明書、日本学術振興会が発行する採用証明書（研究滞在中の収入が明記された証明書）、履歴書（経歴・学歴・研究業績・研究計画・研究内容を記載）、日本学術振興会の海外旅行保険加入証明書を日本で準備し、秘書を通じてバーゼル大学の受け入れ研究者に PDF ファイルで送付した。渡航後にバーゼル大学音楽学部の研究室を訪れ、秘書から滞在許可証を申請するための必要書類を受け取り、個人情報を入力し、バーゼル州のカントンに出向し、上記の書類を提出し手続きを行った。6 週間すると、秘書から滞在許可証が発行されたと連絡があり、無事に滞在許可証を受け取ることが出来た。発行された滞在許可証は、有効期限が 1 年のものであったため、翌年にまた同じ手続きを行い更新した。

バーゼル大学構内で使用する ID カードの発行や、メールアドレスの登録、ポスドク研究員のための寮への入居手続きは、バーゼル大学のウェルカム・センターの職員のサポートを受けた。

スイスの郵便局口座の新規開設は、郵便局の窓口に出向し、滞在許可証を申請中である旨を告げ、パスポート、日本学術振興会が発行する採用証明書（研究滞在中の収入が明記された証明書）、住居証明書（住宅賃貸借契約書等、スイスでの住所を証明する書類で書式自由）を提出し、郵便局員から受け取った必要書類に個人情報や日本のマイナンバーを入力し提出した。2 週間ほどすると、スイスの住所宛てに口座開設を許可する通知とキャッシュカードが届き、さらに 2 週間すると実際に郵便局の窓口や ATM からスイスフランとユーロの通貨を引き出したり、インターネットバンキングで送金したり出来るようになった。ただし、スイスフランの現金が必要だったのは、スイスで研究生生活を送るために行った初期登録の手数料だけで、その他の殆どは、ほぼ全ての店舗でクレジットカードが利用できるため、わざわざスイスで口座を開設する意味があったかどうかは疑問である。

フランスやドイツを筆頭に治安が悪化したと言われているヨーロッパではあったが、スイスのバーゼルで治安が悪いと感じたことは無く、安心して生活することが出来た。バーゼル大学の教職員の方々や、パウル・ザッハー財団のキュレーター、ライブラリアン、秘書の方々、現地で知り合った同じ近現代音楽の海外研究者や音楽関係者、日本から調査に来た同分野の日本人研究者の方々に、とても親切にいただき、また一緒に小旅行に出掛けたりと楽しい思い出を共有することが出来、とても感謝している。

私は、2017 年 3 月に博士号を取得し、同年 4 月から海外特別研究員としてバーゼル大学に派遣されることになり、大学院生の時から取り組んでいたリゲティの一次資料を解読する研究を 2 年間スイスで継続する機会をいただき非常に幸運だったと思っている。しかし、スイス渡航後に体調を崩し、バーゼル大学病院や日本の病院において治療を行ったり、病気を理由とする採用中断を申請し承認を経て日本に一時帰国したため、研究が計画通りに進展したとは言えない。バーゼル大学病院で治療を受ける際は、窓口でパスポートのコピーや、日本学術振興会が発行する採用証明書（研究滞在中の収入が明記された証明書）、日本学術振興会の海外旅行保険加入証明書、住居証明書（住宅賃貸借契約書等、スイスでの住所を証明する書類で書式自由）を提出し、30 分ほどの職務質問を受けなければならなかったが、キャッシュレスで治療を受け、薬局で処方箋薬を受け取ることが出来た。1 週間ほどするとスイスの住所に医療費の請求書が届いたので郵便局で支払いを済ませ、病気が快復したのちに、海外旅行保険の代理店と連絡を取り請求手続きを行った。病気を理由とする採用の中断、一時帰国に関しては、日本学術振興会の職員の方々のサポートを受けました。

2 年間というスイスのバーゼルでの研究生生活を振り返ると、刺激的で楽しい研究生生活であったと思う反面、体調不良で期待通りに研究が進展せずやり残したことが多い研究滞在でもあった。次の項目に研究成果を挙げる。

研究成果

(1) 著書

i. 編著（分担執筆）

1. *Ligeti's Cultural Identities*

編著, (13 人) Amy Bauer (Ed.), Márton Kerékfy (Ed.), Dalos Anna, Louise Duchesneau, Peter Edwards, Volker Helbing, Frederik Knop, Wolfgang Marx, Ingrid Pustijanac, Richard Steinitz, Bianca Temes, Heidy Zimmermann, and Kyoko Okumura, Routledge,

October, 2017, Chap., 12: 'Sketches reflecting the images of San Francisco', pp. 203-218.

(担当: 第 12 章“György Ligeti: Sketches Reflecting the Images of San Francisco”、pp.203-218、2017 年 10 月 2 日、総ページ数 304 頁。)

本著書 *Ligeti's Cultural Identities* は、2013 年 7 月 12 日～14 日の期間に、ハンガリーのブダペスト、及びソンバトヘイにおいて、ジェルジ・リゲティ生誕 90 周年国際シンポジウム *Ligeti and Hungary—Rootedness and Cosmopolitanism* が開催された際に口頭発表した研究者達の論文、さらに、スイスのパウル・ザッハー財団においてリゲティのスケッチ研究を行った研究者等の論文を取りまとめた論文集である。

筆者は、第 12 章の“György Ligeti: Sketches Reflecting the Images of San Francisco (ジェルジ・リゲティ: サンフランシスコのイメージが反映したスケッチ)”を担当執筆した。本著書に掲載された論文は、筆者がザッハー財団で行ったスケッチ研究のひとつの成果である。リゲティの管弦楽作品《サンフランシスコ・ポリフォニー》(1973-1974)に、アメリカの都市サンフランシスコに発生する霧の変容がどのように反映しているのかを論じた。

(2) 学会発表

i. 国内学会 口頭発表 査読有り

1. 「作曲家の自筆資料は私たちに何を語るか——着想から『作品』へ」

日本音楽学会第 68 回全国大会、2017 年 10 月 28 日、京都: 京都教育大学藤森キャンパス 2 号館(D 棟)2 階 D4 講義室。(コーディネーター: 池原舞、パネリスト: 浅井佑太、奥村京子、東川愛、コメンテーター: 沼野雄司)

池原舞(早稲田大学)が、代表研究者として三菱財団人文科学助成に申請し、研究課題「作曲書法と作品構造: ウェーベルン、ストラヴィンスキー、リゲティ、ブーレーズ」が採択された。共同研究者である浅井佑太、池原舞、奥村京子、東川愛の 4 人の研究者によって、2016 年 10 月 1 日～2018 年 3 月 30 日の期間、共同研究が行われた。

筆者は、海外特別研究員として派遣されている平成 29 年 4 月 1 日～令和元年 5 月 1 日の期間、パウル・ザッハー財団で遂行していた研究課題「現代作曲家ジェルジ・リゲティの音楽プロジェクトノート分析」の研究成果を、共同研究者の研究成果と突き合せた。20-21 世紀に活躍した著名な作曲家の作曲プロセスを明らかにするために各共同研究者がこれまでに蓄積してきたスケッチ研究の成果を照らし合せた結果、私が驚かされた各作曲家のプロセスの相違点は、次の 2 点であった。

- ① 各作曲家によって、時間をかけて取り組む作曲段階が異なっていたこと。
- ② 五線紙上に音を記譜する段階において、各作曲家によって作品の全体像に対する意識の度合いがかなり異なっていたこと。

リゲティは、作品の全体像が決まってから五線紙上に音を記譜する作曲家であるため、全体像を固めるまでの作曲過程で数多くのスケッチを残している。全体像を決定するまでの作曲段階に力点が置かれ、五線譜に記譜する段階以降はあまり大きな変更がない。変更がある場合としては、序文の誤植や楽譜上の音楽記号の修正が見られただけで、作品全体の構成に関わるような大きな修正は行われていなかった。リゲティとブーレーズは全体像を決めてから五線紙に音を記譜する作曲スタイルをとり、ウェーベルンは全体像を決めることなく最初から五線紙に記譜する作曲スタイルを取り、ストラヴィンスキーは部分と全体との関連性を探りながら最終的に一つの作品へと辿り着く作曲スタイルをとる。各作曲家の作曲行為の特色が、リゲティは全体イメージを音で描写すること、ブーレーズは全体構造を構築すること、ウェーベルンは恣意的に音列を操作すること、ストラヴィンスキーは部分と部分の連結から全体像を導き出すプロセスそのものにあることが、本共同研究から明らかになった知見であると思われる。

スイスのパウル・ザッハー財団、及び日本の早稲田大学において研究会が開催され、各研究者が行った研究成果を報告し、議論した。共同研究の成果は 2017 年 10 月 28 日～29 日に開催された日本音楽学会全国大会のパネル企画ランドテーブルにおいて報告を行った。

(3) アウトリーチ活動

i. 演奏会における楽曲解説

1. ジェルジ・リゲティの《ピアノ・エチュード》(楽曲解説)

レクチャーコンサート—音楽的錯覚とアイロニー：リゲティ『エチュード』をめぐって、2017年4月22日、大阪：大阪大学 21世紀懐徳堂。

大阪大学豊中キャンパスの21世紀懐徳堂において、2017年4月22日、レクチャーコンサート「音楽的錯覚とアイロニー：リゲティ『エチュード』をめぐって」と題して、リゲティの《ピアノ練習曲》が演奏された。筆者は、リゲティの《ピアノ練習曲》の解説を執筆した。

2. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

バルトーク：弦楽四重奏曲第4番、ドヴォルザーク：弦楽四重奏曲第12番へ長調 op.96「アメリカ」、2019年5月3日、東京：東京国際フォーラム。

ドヴォルザークが、滞在先アメリカの土着音楽から着想を得て一気に書き上げた《弦楽四重奏曲》のほか、バルトークが、アメリカ演奏滞在中の1928年7月から9月にかけて作曲した《四重奏曲第4番》について、楽曲解説を執筆した。

3. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

ストラヴィンスキー：イタリア組曲（ヴァイオリンとピアノ版）、ストラヴィンスキー：ペトルーシュカ 3楽章からロシアの踊り、ドヴォルザーク：スラヴ舞曲、バルトーク：ルーマニア民俗舞曲、ブラームス：4つのハンガリー舞曲、2019年5月3日、東京：東京国際フォーラム。

バルトークの研究旅行の成果である《ルーマニア民俗舞曲》を中心に、ストラヴィンスキーの《イタリア組曲》、ストラヴィンスキーの《ペトルーシュカからロシアの踊り》、ドヴォルザークの《スラヴ舞曲》、ブラームスの《4つのハンガリー舞曲》といった民俗色豊かなプログラムの楽曲解説を執筆した。

4. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

エトヴェシュ：コスモス、ブラームス：ハンガリー舞曲、ストラヴィンスキー：春の祭典（2台ピアノ版）、2019年5月3日、東京：東京国際フォーラム。

ブラームスが魅せられたジプシーの調べが取り入れられた《ハンガリー舞曲》や、ストラヴィンスキーがパリで発表した衝撃作である《春の祭典》、宇宙飛行士ガガーリンが人類初となる有人宇宙飛行に成功する直前に作曲されたエトヴェシュの《コスモス》について、楽曲解説を執筆した。

5. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

リゲティ：「ムジカ・リチェルカータ」から第11番リチェルカーレ〜フレスコバルディへのオマージュ、J.S.バッハ：フランス組曲第1番ニ短調 BWV812、ブラームス：2つのラプソディ op.79から第1曲、ブラームス：4つのピアノ小品 op.119、2019年5月3日、東京：東京国際フォーラム。

旅を愛したブラームスが保養地ペルチャッハとバート・イシュルで書き進めた名曲《2つのラプソディ op.79》や《4つのピアノ小品 op.119》を中心に、リゲティの《ムジカ・リチェルカータ第11番》、J.S.バッハの《フランス組曲第1番》のプログラムノートを執筆した。

6. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

ショパン：ポロネーズ第4番ハ短調 op.40、ショパン：バラード第2番へ長調 op.38、ショパン：マズルカハ短調 op.41-1、ショパン：24の前奏曲 op.28から第13番〜第24番、2019年5月4日、東京：東京国際フォーラム。

ショパンが、恋人ジョルジュ・サンドと連れ立って、療養を兼ねてスペインのマヨルカ島に滞在した時に作曲したとされる《ポロネーズ第4番 op.40》、《バラード第2番 op.38》、《マズルカ op.41-1》、《24の前奏曲 op.28》について楽曲解説を執筆した。

7. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

ブゾーニ：インディアン日記第1巻、ラヴェル：組曲「鏡」から海原の小舟、サン＝サーンス：6つのエチュードop.111ラス・パルマスの鐘、サン＝サーンス：ピアノ協奏曲第5番「エジプト風」によるトッカータ、2019年5月4日、東京：東京国際フォーラム。

北米先住民の民謡に心酔したブゾーニが書いた練習曲である《インディアン日記第1巻》のほか、ラヴェルの《組曲「鏡」から海原の小舟》や、サン＝サーンスの《6つのエチュードop.111ラス・パルマスの鐘》と《ピアノ協奏曲第5番「エジプト風」によるトッカータ》といった超絶技巧が舞う多彩なプログラムについて楽曲解説を執筆した。

8. ラ・フォル・ジュルネ・ジャポネ 2019 (楽曲解説)

バルトーク：ルーマニア民俗舞曲、バルトーク：ヴァイオリン・ソナタ第1番、2019年5月5日、東京：東京国際フォーラム。

各地への民謡採集の旅を通して独自の色彩表現と作風を確立したバルトークの初期の2作品である《ルーマニア民俗舞曲》と《ヴァイオリン・ソナタ第1番》についてのプログラムノートを執筆した。

これまでの研究から得た知見と今後の展望

これまでの研究から得た知見を2点、以下に挙げる。

- ① リゲティの電子音楽創作の実態を明らかにし、リゲティがどのような革新的な方法論を獲得したのかを解明した。さらに、電子音楽創作の経験が、その後の音楽作品にどのように作用していったのかを検証した。
- ② リゲティが、どのような構想を抱いて作曲し、どのようなスケッチを残したのか。またそれらはどのように変化していったのか。1950年代の代表的なリゲティの作品である《アルティクラツィオン》、1960年代の《アトモスフェール》、1970年代の《サンフランシスコ・ポリフォニー》、1980年代以降の『プロジェクトノート』、及び《ナンセンス・マドリガルズ》のスケッチに焦点を当て、各作品のスケッチを作曲の各段階ごとに整理し、順列づけ、精読することによって、リゲティの作曲プロセスを明らかにした。

リゲティは、1950年代後半にケルンの西ドイツ放送局電子音響スタジオで取り組んだ電子音楽の創作において、音の建造物を作り上げるために、方眼紙に図形を描き、その展開を時間軸上に沿って示した。さらに、スタジオでの実験によって作り出された音響の持続時間を管理し、音響の組み合わせを熟考した。また、彼は、ノイズとスペクトルの処理方法を1960年代以降のクラスター作品にも生かしている。電子音楽の創作によって獲得した「図形展開的な作曲方法」、及び、「厳密な時間管理」という2点が、リゲティの電子音楽創作後の作品群にも大きな影響を与えていると言えるだろう。

リゲティ作品のスケッチを精査することによって、綿密に一つ一つの音を五線紙に記譜し楽譜を仕上げていく生真面目な作曲家像が明らかになる一方で、パウル・ザッハー財団が所有している往復書簡集を解読することによって、生活苦や体調不良、強烈なホームシック、恐怖、混乱、自己同一性の喪失に苦悩し葛藤する人間像も浮かび上がってきた。パウル・ザッハー財団が保管しているリゲティの往復書簡集に光が当てられた研究は少ない。この書簡集は、リゲティと、彼の家族、友人、同時代の作曲家、演奏者、批評家、音楽学者等との関係性を明らかにするものである。

今後の研究の展望としては、現段階で862人分に及ぶ往復書簡集の中から、筆者は、リゲティと彼の家族、及び、古くからの友人との往復書簡に焦点を当て、リゲティの恐怖や苦悩といったネガティヴな感情に左右される人間的な姿を浮き彫りにしたいと考えている。家族との書簡は、リゲティの父シャーンドル、母イローナ、弟ガーボル、妻ヴェラ、子ルカシュとの手紙やポストカードのやり取りが主な媒体である。古い友人との書簡は、彼の師シャーンドル・ヴェレシュ、友人ジェルジ・クルタークとマーチャーシュ・シェイベルなどとの文通が特に重要であると推察される。リゲ

ティは、社会主義体制の批判を通して、いかにシステムを設定しそれを崩壊させていくかというアイデアに拘り始めていった。リゲティが、いかに自ら設定した規則に半ば従い、半ば逸脱しながら作曲していったのかを作品分析から明らかにしたい。

リゲティの音楽に感じる規則と逸脱、自己喪失と自己再構築といった「矛盾」が、彼の音楽構造にも見て取ることが出来るかどうか、またそのような二極分裂の中において、リゲティという作曲家／人間は何かという問いについて熟考することが今後の課題である。